

〔教授研究会報告要旨 1〕

2017 年 6 月 21 日（水）

海のカナダと陸のカナダ ——景観からみるカナダの地域性——

大石 太郎

（関西学院大学国際学部准教授）

本報告では、2016 年夏に約 2 か月にわたって実施したカナダ各地の景観観察に基づいて、カナダの地域性を検討した。カナダは世界第 2 位の国土面積を誇る大陸横断国家である。ただし、北アメリカに存在したイギリス植民地が連邦制の自治植民地を形成した 1867 年の時点の版図は、現在のオンタリオ州とケベック州の南部と、ニューブランズウィック州、ノヴァスコシア州のみであり、現在の西部諸州は先住民がまばらに居住する程度であった。現在の版図となったのはニューファンドランド（現在のニューファンドランド・ラブラドル州）が連邦に加入した 1949 年のことである。したがって、歴史的発展のプロセスは地域によって大きく異なる。また、自然環境の違いも大きく、それぞれの地域における生活様式を規定してきた。たとえば、大西洋沿岸諸州では最近まで海に大きく依存した生活が営まれ、現在でも船は交通手段として非常に重要である。ケベック州やオンタリオ州の発展に重要な役割を果たしたのは水路であり、オンタリオ州北部にみられる分水界を示す標識がそれを物語っている。鉄道の時代に入ってから開拓が進んだ平原諸州では、旅客輸送は衰退が著しいものの、トランス・カナダ・ハイウェイに並行して延びる線路には現在でも貨物列車がひっきりなしに走っている。平原諸州が西に向かってゆるやかな傾斜になっているのに対して、ロッキー山脈西麓のブリティッシュコロンビア州内陸部の地形は非常に急峻であり、フレイザー川河口に立地するヴァンクーヴァーの発展は必然であった。カナダでは人口の集積する地域が島のように点在しており、地域経済も多様である。カナダを総合的に理解するためにはこうした地域性を考慮に入れる必要がある。